

# 地域課題解決型キャリア教育 実践に向けて

地域課題解決型学習の構造は、高校に定着してきている課題探究型学習や問題解決型学習と基本的にはかわりない。ただし、キャリア教育の視点に立てば、社会の参画者としての自覚を育てやすいという面がある。では、地域に関心を持ち参画者としての自覚、貢献への意欲や能力、志を育てるためにはどのような工夫がされているのか。実践校の取り組みから3つのポイントをまとめた。

## 課題意識を持つ地域の大人との 出会いをセッティングする

取材した各校には、生徒が地域課題を「自分事」化できるような働きかけが多く見られた。富士市立高校では今の自分たちが「高校生としてできる」解決策を考えている。当事者意識を持つことで問いの質が深まり、リアリティある解決策のための調査、企画立案へと取り組み方が変わってくる。

さらに、生徒が課題をリアルに感じるためには、課題意識を持つ大人との出会いが有効なようだ。可児高校では、地域の課題を本気で考える大人と高校生がグループ討議を行っている。同校の浦崎先生は場を設定するためには「まずは公務員や専門職に就いた教え子に声を掛けるのが一番の近道」という。

行政職員や市民、専門家など実際に課題解決に取り組む人と話をする中で、その想いや姿勢に感化される生徒も多い。また、社会構造や仕事の理解が深まり、自分がどのように社会に関わってゆきたいのかを考える機会ともなる。

そうして学校教育に関わりを持った地域の大人が、生徒の活動を支えるサポーターとなってくれることもある。お互いを知る、関心を持つ、考える、伝える—このプロセスは学校と地域が双方の課題解決に向けて歩み寄るプロセスとも重なるようだ。

## 校外に向けた

## 発表・提案の場を設ける

調査を進め、課題を解決するための提案を考えたら、生徒たちのアイディアは校内で発表するだけではなく、地域に渡し、同時に取り組みに対する校外からの評価ももらいたい。ポジティブなフィードバックは自信につながり、厳しい批判も貴重な振り返りの機会となる。

市役所での地域活性化案のプレゼンをゴールに置く和歌山信愛高校には行政からの期待も大きい。高校生の本気が大人を触発することもあるのだ。

また、各種コンテストも発表の場となる。隠岐島前高校は観光甲子園に応募

し、観光プラン「ヒトツナギ」がグランプリに輝いた。ツアーは生徒によって催行され、参加者から多数の入学希望者が生まれるなど、生徒の活動によって学校の魅力化と地域の活性化がさらにすすむ契機となった。

## 生徒を信頼し、 企画の実行・実現を後押し

企画の実行自体をプログラムに組み込んでいる学校もある。御調高校ではご当地ヒーロー「ミツギレンジャー」の活動を毎月、生徒が企画し、レンジャーが地域で活躍している。また、函館商業高校や男鹿海洋高校では、商品開発をし、人の手に渡るまでを経験することで、生徒に達成感や自信をもたらしている。

生徒企画による防災イベントを実現させた西湘高校の釣田先生は「生徒たちがすごいんです」と言う。しかし、釣田先生のように生徒の力を信じ、自分たちでやってもらえよ、という先生がいるからこそ生徒は主体性を発揮できる。

生徒が地域の大人と出会い、地域課題についてチームで考え、さらに課題解決に向けて行動する。この経験が、変化する社会の中で課題を解決してゆける人を育てる。「自分の未来も、社会の未来も自分たちでつくることができる、変えることができる」という感覚をつかめることが、地域課題解決型キャリア教育の可能性ではないだろうか。

### 地域課題解決型キャリア教育授業のポイント

